

大楯七兵衛の遺業が受け継がれ、選奨土木遺産に

くりはらいわひ 来原岩樋



貞享4年（1687）大楯七兵衛によって開削された高瀬川は、川幅4間、水程2里の松江藩最大の用水で、出雲平野西部に多大な恩恵を与えることとなりました。しかし、斐伊川からの取水施設汗入ヶ樋は木製であったため強度は十分でなく、洪水時には決壊する恐れがありました。

このため、七兵衛は岩樋に改めようとしたが病のために断念し、二代目忠左衛門に「岩樋を切貫き、汗入ヶ樋を埋め立て、間府を切貫」と遺命したものの、二代目もその4カ月後に没しました。このとき孫の才三はわずか6歳でしたが成人して忠左衛門朝則となり、元禄12年（1698）祖父の遺業に着手、翌年完成させたとのこと。ただ、この時才三はわずか17歳であり、岩樋の開削は松江藩直営事業によるものでないかという説もあり、謎に包まれた土木遺産といえます。

来原岩樋は斐伊川左岸の来原にある岩山に、下を幅約2.6m、高さ約4.2mの穴を9.1m掘りぬいて左岸の水溜り池に導水したもので、その池からは西の塩冶地域を潤す間府川も流れ出ています。また、岩樋は農業用水の取水だけでなく、斐伊川と高瀬川をつなぐ高瀬舟の往来にも利用されていました。天井川の斐伊川との連絡は、3段のゲートを上下させることで水位を調整しながら船を通過させる「閘門式構造」がとりいれられていました。

国内では見沼代用水の通船堀（埼玉県）が日本で最古とされていますが、通船堀の完成は1731年で、来原の岩樋の完成はそれより31年も早いということになります。となれば、わが国に現存する運河閘門としてはおそらく最古級です。こうして国内では珍しい連続閘門となっていることが評価され、平成26年度選奨土木遺産に認定されました。

この岩樋は松江藩によって厳重な管理がなされてきました。その命を受けた初代岩樋守が尼子氏の遺臣から帰農した本田家です。元禄13年（1700）の来原岩樋の開削に伴ってこの地にうつってきた本田家は、かつて藩の大坂（現・大阪）お登米輸送の任にも当り、さらには私財を投じて砂よけの鯉尾土手を築造するなど、地域のために多大の貢献をしてきました。

秘伝の操作技術を伝えること十代、約300年にわたって来原岩樋を守ってきた岩樋守によって、現在もその任は引き継がれています。

■位置図



「水寄せ」を行っている岩樋取水口付近

水寄せは斐伊川の水量が少なくなると、砂をかき寄せ水を導き取水を容易にする方法。水寄せには上流の取水口よりさかのぼってはならない、川の中心線を越えないなどの約束があり、こうした慣行を守りながら行われてきた。



居越水門（来原岩樋の呑口）



来原岩樋 川の向こう側が斐伊川、手前が水溜り池。



岩樋出口の水溜り池
岩樋を通った水は水溜り池に入り、ここから高瀬川と間府川に分かれる。



高瀬川
出雲市街地の中央を町並みに沿って旧大社町荒木地区まで流れる12kmの農業用水路